

探訪 北の風景 101

アオトラ石が縄文初期の石斧に 二風谷コタン(日高管内平取町)

青木和弘

日高管内平取町二風谷(にぶたに)は、沙流(さる)川流域に息づくアイヌ文化の継承地である。現在169世帯、329人が住み(2022年7月末現在)、住民の7割がアイヌ民族という正銘のアイヌコタンである。貧しかったが周りみんながアイヌだったから差別を感じることもなく、おおらかな土地柄と言われていると、二風谷在住のアイヌ文化研究者で、多数の著作を残した故・萱野(かやの)茂氏が、著書の『アイヌの碑』(朝日文庫、1990年刊)で述べている。

実は二風谷の歴史は古い。秋田県の上掬(うわはば)遺跡は縄文前期(7000年〜5500年前)のもので、そこから出土した巨大な石斧(せきふ)4本を分析したところ、いずれも二風谷だけで産出する「アオトラ石」だと分かった。6年前のことだが、この石は、道内はもちろん、津軽海峡を隔てた青森県の三内丸山遺跡で出土した石斧の6割を占め、アオトラ石の石斧の分布は山形県や新潟県にまでおよぶ。折れにくい適度な粘りと研磨のしやすさがあり、研磨前の半完成品を二風谷から供給し、木の伐採や、土を掘る道具として広く使われるようになった。

話は変わるが、「二風谷コタン」には、復元されたかやぶきのチセ(家)が9棟もあり、奥の方に「二風谷アイヌ文化博物館」や「沙流川歴史館」がある。博物館の展示は、萱野氏がアイヌの伝統工芸品や生活用具の散逸を防ぐために収集し、国の重要有形民俗文化財に指定された品々が中心だ。歴史館では、縄文初期から始まる沙流川流域から出土した石器や土器などの埋蔵文化財や、周辺遺跡の解説などを見ることが出来る。

国道237号を挟んで反対側には、民芸品の制作工房が軒を連ねるが、コロナ禍で団体客の入り込みがなく、どの店も閉じたままだった。でも、アイヌ工芸伝承館「ウレシバ」と「萱野茂二風谷アイヌ資料館」は興味深く見学できた。

アイヌの文化施設では、2020年に開業した「ウポポイ」(民族共生象徴空間・旭振管内白老町)が話題にのぼり、最新鋭の大規模施設で快適に見学できるのだが、チセの造りなどが、実際にはありえない現代設備になっていて、二風谷の土や樹木の匂いがする実物のチセの再現とはかけ離れて



博物館の展示の中心は、萱野茂氏が二風谷で収集した品々で、巨木をくりぬいた丸木舟をつくるのにアオトラ石の石斧が使われたという。道東の漁場に連行されて強制労働を強いられた若者が、宝物として大事にしていた漆塗りの酒を飲むわんは、帰り際に報酬として受け取った唯一の品だった。そんな人々の肉声が聞こえるような展示もある

いる。だから博物館の展示内容も含め、私は二風谷コタンに軍配を上げたい。

アイヌ民族は縄文人の遺伝子を一番色濃く受け継いでいるといわれる。縄文人は戦争のない社会を1万年にわたって実現した奇跡の人々だ。その文化を引き継ぐアイヌ民族も、自然と共生して毎日の糧を得、チャランケという徹底的な話し合いで争いを避け、国家や軍隊を持たない生き方を続けてきた。この間、和人による抑圧に抗して蜂起したコマシャインの戦い(1457年)やシャクシャインの戦い(1669年)、クナシリ・メシナの戦い(1789年)があるものの、極めてまれな出来事だった。

萱野氏は晩年の著書『アイヌ歳時記―二風谷のくらしと心』で、和人に対する、アイヌ民族のやりきれない思いを吐露している。

「魚を必要としたら小さな網を持って川へ走り、





「二風谷コタン」には復元されたチセが9棟あり、大きな造りのチセは集落の長の家や、集まりに使われるような施設で、それより少し小さなチセが一般的な住宅。チセに付属して、高床式の食糧倉庫、男女別々の便所、生け捕りにした子グマなどを飼うおりがある。復元されたチセは昭和初期ごろまで実際に使われていたものと同じだという

菅野茂二風谷アイヌ資料館の展示。アイヌ民族の工芸品や生活用品、仕事の道具などが所狭しと並ぶ



「縁結び石」が資料館の側にある。別の場所で別の次期に見つけたアオトラ石で断面がピッタリ重なる

肉が食べたくなったら弓矢を手には山へ走った。すると、川の神様は魚を供給してくれるし、山の神さまは肉を持たせてくれたし、海の神さまはこれまた海藻でも魚でもくれたし、アイヌがひもじい思いをしないほど用意されてあった」

「日本人が勝手に北海道にやってきて、手始めにアイヌ民族の主食（であるサケ）を奪い、日本語が分からない、日本の文字も読めないアイヌに一方的にサケを獲ることを禁じてしまった。（略）サケを獲れば密漁だ、木を伐れば盗伐だ、と手枷足枷そのものであった」（カツコ内は著者補足）。

江戸時代後期には、一家の働き手が根室や厚岸の漁場に連行され、強制労働を強いられるもいる。

民族の多様性を理解し、文化と伝統を尊重して共生する知恵を身に着けることの大切さを学びたいものだ。ぜひ、一度、二風谷コタンに足を運んで、じっくり過ごしてもらいたい。